

目的 恋愛感情や異性に対する意識が、その人の被服行動に何らかの影響を及ぼすのではないかと考え、前報では、恋愛意識と被服行動との関係を探る試みとして、Leeの恋愛類型論に基づいて作成された尺度LETS-2を用いて検討を行った。本研究では、新たに作成した恋愛感情・異性観測定尺度と被服行動測定尺度を用いて、恋愛感情の構造を分析し、それらの感情と被服行動との関係を検討する。

方法 京都の女子大生 200名を対象として1995年11月にアンケート調査を実施した。有効回答者数は 172名である。調査内容は、恋愛感情や異性観24項目、被服行動33項目で、いずれも7段階で回答を求めた。恋愛感情・異性観の質問項目を変数として行った因子分析より抽出された因子ごとに評定値を合計して尺度得点とし、その得点の高・中・低の3グループに対象者を分割して、被服行動との関連の有無を χ^2 検定により分析する。

結果 前報の考察を参考にして因子数を4に固定した因子分析を行った結果、恋愛感情・異性観は、純愛、独占的な愛、実利的な愛、友愛の因子に分かれて出現した。友愛の尺度得点の高いグループは「たとえ彼が気にいらなくても、自分の気にいった衣服を着用する」のに対して、純愛や独占的な愛の尺度得点の高いグループは「男は男らしく、女は女らしい服装をするのがよいと思う」と性役割重視や、「彼の興味をひきつけるためにドレス・アップをする」など男性を意識した被服行動をとる。実利的な愛の尺度得点の高いグループは「最良ブランドの服を買うようにしている」傾向があることなどが関連づけられ、恋愛感情や異性観の違いが被服行動に影響を及ぼすことが明らかになった。